近藤久義さんを追悼する

大里　浩秋
（非文字資料研究センター　客員研究員）

天津旧日本租界関係の貴重な資料を多数寄贈してくださった近藤久義さんが、2021 年 6 月 13 日にお亡くなりになった。1932 年中国天津に誕生、享年 90 歳だった。2010 年頃、兄上恒弘さんを含む子供時代を天津で過ごした数人の方のお一人として大学に来ていただき、その頃の経験談をしていただいた時が初対面だった。

その後恒弘さんからは天津を主に中国東北地方に広がる地域に関する資料、特に絵はがきを多数寄贈していただくとともに、天津での体験を語っていただいた（「近藤恒弘氏に天津租界地での体験を聞く」、『東アジアにおける租界研究―その成立と展開』、2020 年）。

一方久義さんについては、天津の中国人研究者への資料寄贈を主にした活動をされ、東京を中心に日本の数か所で天津租界時期の資料の展示をしたり、戦前そこに住んだ日本人および現在日本に住む天津出身の中国人を交えた集まり（天津会）を実施したりしておられると伺い、2017 年春に孫安石さんと一緒にお宅にお邪魔して収集されてきた資料の数々を見せていただいたのをきっかけにして色々教えていただくことになった。そして、19 年冬まで複数回に分けて資料を寄贈してくださり、そのうちの数回はご自分の運転で非文字の事務室に届けてくださったことがあったが、この 1 年余りはコロナ禍の影響でお目にかかる機会がなく、お元気か気になりながら病気で亡くなっていることを遅れて知ったのである。

17 年 8 月に租界班の研究会で報告していただいた時のレジメ（「展示会の歩み―郷土史研究で日中友好」）や著書『天津を愛して百年そして子々孫々』（新生出版、2005 年）に従うと、久義さんはご家族ともども 1946 年に帰国された後 89 年に 42 年ぶりに天津に出かける機会があり、その後は仕事の関係でも行く機会が増える中で、その地は「私にとっては故郷、郷里なのであります」との実感を深めた。そして退職後、天津に関する歴史資料の収集を始めたところ、資料が少ないことに気づいてますますその収集に力を入れることになり、ただ資料を集めるだけでは「宝の持ち腐れ」になるのを恐れて、中国では入手困難な日本側発行の資料を天津の研究機関に数回に分けて寄贈するとともに、ご自分でも上記の著書に加えて『昔日天津、今日天津』（新生出版、2006 年）と題する天津日本租界の変化を中心としてまとめた労作を公刊されている。

思うに、戦前中国各地に住んでその時の思い出を後になつかしく綴った文は数多く存在するけれども、戦前に中国への進出を是として書いた日本人による各種の中国観や租界論を含めた資料を収集して中国の研究機関に寄贈した久義さんの志は、単なる天津へのなつかしさを確認するにとどまるものではなく、かつての日中関係と今後の関係を冷静に見つめようとするものであった。頂いた資料を大切に活用したいと思うこと切なるものがある。

租界・居留地班第 58 回研究会にて「天津日本租界資料の収集と同郷会活動」と題してご講演。中央が近藤氏。2017 年 8 月 5 日撮影。

2018 年度第 3 回公開研究会【戦前の青島と日本を巡る円卓会議】にて、ゲストとしてコメント。2018 年 11 月 30 日撮影。

なお、久義さんから寄贈された資料は、恒弘さんから頂いた資料や私たちで収集した資料と合わせて整理公開できるように作業を進めているところである。

追記　ご遺族から、9 月に天津市名誉市民になられたことを伺った。久義さんの、資料提供をはじめとする長年の文化交流が高く評価されたことを喜びたい。